

国内サバティカル報告 (2012年10月～2013年3月)

先駆的取り組みをしている 小規模多機能型居宅介護事業所の実態と、 その介護サービスを利用している複数家族へ 茶話会等を通してケアへの思いを聞く

A Report on Activities of Innovative Care Services in Small Multi-Care Facility,
and Interviewing about Users' and Their Families' Thinking Through Tea Parties

柴田 範子*
SHIBATA Noriko

はじめに

介護現場の取り組みに疑問を持ったのは、介護保険制度が始まる1年前の1999年あたりからであった。介護・福祉関係者は介護保険制度そのものの枠に対応する準備に余念がなく、ケアの質に対して手薄だと実習巡回を繰り返す中から強く感じられた。この頃、要介護高齢者の増加に対し、施設入所枠が追いつかず、入所できる高齢者は宝くじに当たったようなものと言われた。

それ以前、私は川崎市内の福祉事務所でホームヘルパーとして勤務した間に、施設入所する当日、わずかに離れていた30分後に座布団に横たわって亡くなった方、入所数日後に亡くなった方に出会っている。事例は共に一人暮らしだった。これまでの暮らしの場を離れ、新しい環境に順応できるだろうか等、これから先のことを考え心を閉ざし亡くなったのか。お年寄り（多くは認知症高齢者）の幸せについて考えるようになった。2004年春、特定非営利活動法人 楽を設立し、認知症の人と過ごせるデイサービス（365日型 宿泊有）を開設した。法人として、どのようなケアを目指すのかを深く考え開設に至った経緯がある。ご家族の悩みを聴く中で、デイサービス単独では機能が弱いことを実感し、新しい介護サービス 小規模多機能型居宅介護に移行することを決め実践し、現在に至っている。

2014年春、法人を設立し丸10年になる。医療とかかわりながらも、自宅で看とられていった利用者数名。個人的には最も自然な死に方であったと受け止めてきた。デイサービスとの違いは必要に応じて訪問をしてきたことである。利用者・家族の自宅での暮らし方や思いが理解でき、家族だけでは不足するケアを担う。そして、不安や悩みもその場で受け止めることで、家族が在宅で看ていこうと心

*東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 Toyo University, Faculty of Human Life Design
住所：〒351-8510 朝霞市岡48-1（東洋大学）

を決められる。

狭い視点で小規模多機能型居宅介護事業をしている可能性がないとは言えないと考えることがあった。半年間のサバティカルを利用し、先駆的な小規模多機能型居宅介護事業所に伺い、現場を見て、関係者や介護サービスを利用している家族にケアについての話を伺いたいと考えた。気づけなかったことに気づけるかもしれないという期待をもって、地方を回らせてもらった。

(小規模多機能型居宅介護と言う名称が世に出たのは平成18年4月。先駆的取り組みをしてきた宅老所の考え方を、介護保険制度の介護サービスの1つに位置づけた)

訪問した先は以下の通り。

1) 10月1、2日

松山市 小規模多機能だんだん 伊予郡 小規模多機能あったか

2) 10月17、18日

愛知県豊橋市 社会福祉法人真寿苑ケアサポートセンター真寿苑ご家族1名に聞き取り

南医療生協、その関係のグループホームなども、星崎診療所に併設の老健あんき、デイケア

小規模多機能あんき、小規模多機能もうやこい、小規模多機能おさぼり

3) 11月23、24日

石川県加賀市 小規模多機能 はしたて 食事をしながらご家族8人に聞き取りをする

小規模多機能 山代すみれの家 ご家族2人に聞き取りをする

4) 11月28、29日

岡山県倉敷市 小規模多機能 ぶどうの家 ご家族1人から聞き取りをする

同法人 サービス付き高齢者住宅 花帽子

5) 12月19日

秋田市 小規模多機能和ごや家

6) 1月25～27日

北海道 美瑛 小規模多機能七彩、小規模多機能ひなた 小規模多機能橙 小規模多機能虹

4か所のご家族8人の聞き取り

幌加内 小規模多機能 スマイルホームえん

7) 2月18日

石川県加賀市 小規模多機能ホーム きょうまち ご家族への聞き取り

動橋 ひまわりのいえ ご家族への聞き取り

8) 2月26日

熊本 特定非営利活動法人コレクティブ きなっせ、いつでんどこでん、いつでんきなっせ、

よんなっせ、縁がわ、いつでんくるばい

9) 2月27日

鹿児島 医療法人 明輝会 小規模多機能型居宅介護ひばり サテライトろうけん青空

10) 2月28日

鹿児島 株式会社浪漫 共生ホーム よかあんべ 地域サポートセンター よいどこい

ご家族への聞き取り

11) 3月4日、5日

福山市 小規模多機能さくらホーム 原の家 ご家族への聞き取り

12) 3月15日、16日

愛媛県南宇和郡 デイサービスセンター「結い」じょうへん

共生型小規模多機能型居宅介護事業所「アロハ」

NPO法人ハートinハートなんぐん市場

「山出憩いの里温泉」(財)正光会 御荘病院 長野 敏宏先生の案内

1) ① 松山市 小規模多機能だんだん

株式会社が運営し平成19年5月開設。民間企業の寮であった建物を1階小規模多機能型居住宅介護、2階を訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、3階を地域交流・研修室に活用している。登録人数が20名、泊り3名。登録人数20名が既に利用し、自宅から家財道具を運んで住み続けている利用者が2名。室内には自宅で飼っていた猫も一緒に住んでいた。また、遺影も飾られていて、利用者さん個々の住まいの特性があった。ここでの雰囲気は管理者の人柄か、とても賑やかで利用者さん1人ひとりの表情が明るい。鉄骨の階段が玄関先にあり、会社の寮であったことは一目瞭然。当初、使いづらさはあったと言うが、日々の暮らしの中でケアそのものに影響はないと言う。住宅地の中にあり、近隣の方が利用している。



だんだん



鉄骨の階段が建物の中に



自宅で飼っていた
利用者の猫

② 伊予郡 小規模多機能あったか

社会福祉法人砥部寿会が運営する小規模多機能型居宅介護。職員は法人の特別養護老人ホームから希望者を募り配置した。希望者が多かったと管理者。法人が地域で展開する介護事業の必要性を感じ、地域との関係作りに力を注ぐような考えに至り、建物は地域の大人も子供も利用できるように楽しさ、面白さを取り入れている。小規模多機能型居宅介護と地域の方が使用する場とのつなぎ廊下には、上から漁網がうまく張り巡らしてあり、落ち着いた雰囲気を醸し出していた。近所の子供たちも気軽に足を運べるように、穴倉に子ども図書館を作っている。転がった姿勢で本が読めるような工夫もされていた。あったかは25名の登録、9人の泊り。ここでも、其々の理由はあるが9室中6室に登録しているお年寄りが住んでいた。他の方が泊まりたいとき、調整が必要だと言う。生活保護受給者への減免など、社会福祉法人として利用しやすい体勢を考えていると管理者は語っていた。



地域の方が利用すること
を想定して作られた
穴倉の奥は子ども
図書館
泊りの部屋

2) ①豊橋市 社会福祉法人真寿苑 ケアサポートセンター真寿苑

平成23年3月 豊橋市に複合型施設「高齢者福祉施設真寿苑」を開設し、地域密着型特別養護老人ホーム真寿苑、グループホーム真寿苑（ユニット定員9名×2ユニット）、ケアサポートセンター真寿苑（小規模多機能型居宅介護）（定員25名）が併設されている。豊橋市では第一号の小規模多機能型居宅介護である。9室中7人の方が住んでいる。

小規模多機能施設としては新しく、しかも、複合型施設となっていることからだろうか、フロアに案内されても小規模多機能型居宅介護の感覚をもてなかった。特養の体制と変わることなく一日が動いているからかもしれない。対応してくれた職員も、小規模多機能型居宅介護とは何かについて、きちんと理解はしていないと言う。これから、一歩ずつ理解が進むといいがと思った。

利用者のご家族（妻 70歳代）が聞き取りに応じてくれた。特養でないことはわかるが、小規模多機能型居宅介護のことは理解できていないと言う。また、「兎に角、住まわせてもらえることがありがたい。夫は脳出血の後遺症があったが、リハビリがうまくいって歩行も可能、言葉も出ている。高次機能障害と診断名がついた。娘の家族も大変で、介護者の自分自身の体力が限界となったのでお願いした。夫（76歳）は中日の大ファンで、中日のことなら知らないことはない。プラモデルも大好き」等を話してくれた。今の最大の心配事は終末の場面だと言う。

対応してもらえた職員に、聞き取りに協力してもらえた方の夫を紹介してもらおう。船のプラモデル作りの最中、自己紹介をさせてもらい「中日が大好きだと奥様から伺いましたが」と聞く。水原茂監督、星野仙一監督のことを思い出しながら熱く話してくれた。職員から「いつもは殆ど話してくれない人で困っていた。あんなに話す人なんですね」と驚いた様子だった。



船のプラモデル作りの
最中
複合型施設「高齢者福祉施設真寿苑」

②－① 南医療生協、南医療生協の歴史は古く、伊勢湾台風がきっかけとなり、「みんなが安心して暮らせるまちづくり」が始まったと、南医療生協の事務長 大野京子氏（地域ささえあいセンター）氏から伺った。1961年 南医療生協の設立、南医療生協最初の診療所として南診療所が組合員308名の手で作られた。

医療生協設立の前、伊勢湾台風の前に作られた診療所は、1953年にパン小屋を改装して作られた。その時の医師が女医のいわき先生。診療所設立の原点になっている。南診療所、そして、1965年 星崎診療所を設立、1968年 宝診療所設立後も次々に診療所を設立。2004年には、グループホームなもを設立、2005年～2006年にかけて生協ゆうゆう村を設立、2007年 小規模多機能型居宅介護もうやいこを設立、2008年 星崎診療所新築移転、老健あんき、のんびり村設立、2010年 南生協病院移転、かなめ病院改築と辿ってきている。特に南生協病院の移転に当たっては、約4年をかけて1000人会議を持ち、基本構想10ゾーンを作り徹底的に話し合ってきたと大野京子氏からの説明には力が入っていた。大野氏は一日、南医療生協関係の施設等の案内役として同行、長くこの組織にいるからこそその説明が分かりやすかった。

南生協病院への寄付金を2億円ほど集め、病院と併設する地域ささえあいの場をつくった。お金を出資するのは組合員、さまざまな場所探しも組合員がママチャリに乗ってチャリンコ隊と称して活動してきている。すべて班の組合員の活動にあるという。寄付金額が大きいので、病院建築のために不足分を銀行から借りることはスムーズだったと言う。病院の中には、病院らしいゾーンと病院らしくないゾーンをエントランスで融合させていた。組合員の意見は「健康づくりを応援する病院になってほしい」であって、話し合いに4年をかける。大野氏が組合員の班活動から出された意見を持って理事会へ。医師は病気を治すための良い環境が必要という。医師は組合員に予防が大切だから運動を勧めるが具体的にどのようにすることが良いのかわからないと組合員。医師と組合員との意見の相違を近づけるために、話し合いを重ねて、病院内にスポーツジム（写真①）を作った。運動療法士などが一人一人に合ったメニューを作り、評価する。成果が出ていると大野氏。病室入り口には組合員の作ったぬいぐるみ（写真④）が置かれている。ベッドカバーも一人一人違う。組合員の創意で実践されていること。病院の周りの樹や花も、すべて組合員のボランティア行動。人が手を加えている環境整備関係には、殆ど病院からの資金は出ていないと言う。病院の1階にはオレンジのエプロン（写真③）をつけた案内係が。組合員としてのプライドを持ってボランティア活動を活発に行っている。職員より病院内のことは詳しいようだ。一階は病院の受付等がある一方で、銀行や旅行会社もある。駅に向かう地域の方は、この病院一階のフロアを通して駅に向かう。その姿は日常茶飯事と。病院の中には病児保育室（写真②）も設置されていた。一階には別棟があり助産所（写真⑤）も作られている。中には情報交換の場があり、妊産婦の方々が賑やかに会話していた。産婦の入院時、サラリーマンの夫が朝子供を連れてくることができるように預かることも可能に、出産まで家族が泊まれるようにもしてあった。病院を囲んで、必要だと言われるものを揃えた。保育園、自然食材、パン屋、薬局（写真⑥）など、すべて組合員が1000人会議で提案してきた意見を実現させたものである。これまでの話し合いで、基本理念の擦り合わせができたことが、その後の運動を積み上げていく上で良かったのだと言う。

①



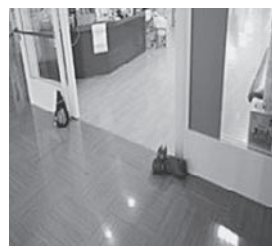
②



③



④



⑤



⑥



南医療生協関係に関する映画「だんらんにつぼん 愛知・南医療生協の奇跡」が2012年6月に公開されている。

②-② 星崎診療所、併設の老健あんき、老健あんきデイケア 小規模多機能あんき、訪問介護ステーションほしざき

ここでは、常務理事 中村 八重子氏 理事 川出 栄子氏 事務長 河内 裕子氏が説明・案内に対応。診療所の最も古い写真にあるスクーターは前・理事長 室生昇氏（写真②）のもの。スクーターを写したくて撮ったので星崎診療所の写真が残っているのだと笑う。1965年、南医療生協に合流してきたのが星崎診療所。人との出会いを作るために、じゃんじゃん班会、婚活パーティーを企画。訪問した日は通所リハの皆さんは外食の日だった。建物の中でさんまを焼いたりすることもあると笑いながらの説明があった。職員全体がパワフル。パン小屋を改装して診療所にしたという伝統もあり、必要な物は自分たちで作る、足りないお金は集めると言う考え方がしみついている。寄付をしてくださる方が、組合員が通りかかるのを待っていて、数十万円を手渡してくれたと言う例もある。星崎診療所（写真①）50年の歩みにこれまでの取り組みが取り上げられている。（写真②）

①



②



②-③ グループホームなも、小規模多機能もうやこい

「なも」（写真①）は組合員がこの辺にあったらいいねと、必要性があるとして物件を探す。組合員の娘さんが土地も建物も無償で貸してくれることに。なもが開所する2004年頃は、介護職員を公募しても応募がない時期だった。なもで働いてもらう職員も組合員達が「あそこのお嫁さんは確か資格を

持っている筈だ」と言いながら直接に当たる。ものすごい情報量だと説明に当たってくれた大野氏が振り返る。新幹線、JRが「なも」のすぐ近くを通っているが、音はあまり気にならない。古い家は古い家なりに使うことで、人との交流の場として色づく。お年寄りが自分たちの役割をもって、仕事をしている居場所になっていた。

「もうやいこ」（写真②）は県で第一号の小規模多機能型居宅介護事業所である。グループホームと違い、地域への説明に時間がかかったと言う。しかし、他の事業所よりは地域との繋がりは深いために介護職員確保に時間はかからなかった。口コミが重要な役割を果たしていた。今では、近隣の利用者さん、近隣の方が職員として見えていて、いい関係が保てているようだ。管理者は「ご家族に、急なことでお願いしていい？と遠慮なく言える関係になってきている。こちらからも、その日の泊りをちょっとずらしてもらえませんかとも言える」と話していた。管理者は元々社会福祉法人で3年前まで働いていた人。「出かけるには外出計画書を作成し許可をもらう。手続きが大変。以前の自分だったら、ここの方々が畑で野菜とっている姿を見たら、何やってんだと思っていたと思う。考えられないことですよ。でも、今、それらのことは自分の中で当たり前、必要なことと言えます。ここは最初から地域の応援団がいるわけですから、物凄い力だと思うんですよ」と、しみじみと語っていた。広い庭さきの草取りなど近所の方が来て作業してくださるとのこと。

①



②



②－④多世代共生村「生協のんびり村」 グループホームほんわか、小規模多機能ホームおさぼり、多世代共生住宅あいあい長屋、喫茶 ちゃら

「のんびり村」を作るに当たっては、組合員を増やし、出資金を増額する必要があることから、組合員が夕焼け訪問などをして、協力してくれる組合員を募った。

この地域は田んぼだったところ。持ち主の組合員がマンションでも建てようかと言う考えもあったが、できたら医療生協で使ってほしいと提案してくれていた。10年以上前の話で、お互いが温めていたことだそう。まちづくりをしようという話が出て、流しそうめん祭りで出資金を募ることに。1017万2000円にもなった。ウッドデッキなどは地域のボランティアがすべて作業してくれて工事費が安くあがっている。地域の組合員の協力があることでできることである。オープンまでに足かけ4年かかっている。

「のんびり村」の方針は「安心・安全・ありがとう」を合言葉にしている。居場所づくり、見守り・見守られる関係作り、自分でできることは自分でやる、「どなたでもどうぞ」と、地域のたまり場と言う考え方で取り組んでいる。ここで小規模多機能型居宅介護を利用している方々は、近隣に住んでいる。地域の知り合い同士がプラスに働いているようだ。

ほんわか、おさぼり、あいあい長屋に住んでいる方々は、職員の方々ととても自然な感じ。カメラを向けると、管理者の若い男性と数名の利用者さんが一緒に収まる。素敵な表情がここでの住みよさを教えてくれているような気がした。その時の写真を掲載できないのが残念。



のんびり村のパンフレット



ほんわかとおさぼり



ぼけない小唄がおさぼりに



おさぼり利用者の地域の地図を写真付きで

3) ① 石川県加賀市 小規模多機能 はしたて

加賀市の小規模多機能型居宅介護を運営する事業者を決める過程は、他市と違い、行政が古い、小規模多機能型居宅介護に適すると思われる物件を探し出し、業者を公募するという特徴がある。加賀市は小京都と言われるほど、民家が落ち着いた趣をもっていて、その風情を壊さずに新たな息吹を吹き込んでほしいと言う市の担当者の思いなのかもしれない。特徴の2つ目として、小規模多機能型居宅介護の事業者同士が連携し勉強会をしている。勉強会は全国でも先駆的。担当職員が以前、厚生労働省に出向していた経緯がある方で、地域生活を叶えるための考え方が素晴らしく、それが、市内で小規模多機能型居宅介護を運営している事業者の根底にしみこんでいる。よって、お互いが顔見知り、良く声を掛けあっている特徴がある。

はしたても応募してプレゼンテーションで運営理念、かかわりで大切にしていること、かかわりの4つの原則、小規模多機能型居宅介護事業所の運営理念等について説明している。

開設は2010年10月、登録定員25名、通い定員15名、泊り定員5名。

はしたてのかかわりの4つの原則は次のようなもの。

- ・利用者のペースに合わせること
- ・優しく触れ合うこと
- ・同じ目の高さで接すること
- ・ダメと言わないこと とあり、具体的でとても分かりやすく表現されている。

● はしたてで利用者家族と昼食をとりながら懇談会を企画してもらえた。

8家族が参加してくださり、テープで記録することを了解してもらった。

- ・温泉街で働いていた義母を看ている方は、困った時、兎に角、すぐに対応してもらっている。だから、働ける。決して、義母に大事にされてきた自分ではないが、人として義母を看ていきたいと思っているので、はしたてに縁ができ、ここならできる。
- ・妻が認知症の夫とその孫（公務員）が参加。孫は祖父の祖母に対する姿勢に頭が下がる思い。自分が結婚しても祖父母の姿勢を大切にしたいと話す。夫は「妻は健康クラブに入っていて元気だった」と話す。6年前から物忘れや、歩きぶりが悪くなって、これはいかんと脳神経外科だったかに連れて行ったら「認知症です」と言われた。山の中にある温泉や、プールに連れて歩いた。徐々に

歩き方が悪くなって「孫がこれはおかしい」と言う。(孫は公務員で調査員や地域包括の職員と話していて、認知症じゃないんじゃないかと言われ病院を変えて診てもらおうと正常圧水頭症だった)手術したら改善して凄い。はしたてには1週間に3回行って、風呂にも入れてもらっている、ありがたい。(孫は家族はみんな仕事をもっている。今は通いだけだが、何かあった時は泊りの対応もできるという事なのでありがたいと)

- ・施設に勤めている間に義理の母が認知症になった。義父が見ていたが突然亡くなって、夫と看るようになった。義父の葬儀の時もいなくなったり、夜中に向かいの魚やさんが連れてきてくれたり、今は夫と母を真ん中に川の字になって寝ている。骨折して入院した時、病院には施設に入れないと大変だよと言われたけど、亡くなった義父との約束で私が看ると話していた。最初はある事業所さんをお願いして、仕事に行くとしてお迎えに来てもらっていたが、徐々に嫌がるようになった。はしたてさんに移ってから楽しみに行くようになった。私は仕事をしているので、朝早く連れて行ってとお願いしたり、思わぬことも起きるので、それに対応してもらえるので、とても喜んでいる。夫も賢くなって、義母に「じいちゃん」と呼ばれたら「はい」、「〇〇(息子さんの名前)」と呼ばれたら「はい」と、夫になったり息子になったり。できることなら、最後まで家で看たいと思っている。はしたてが足りないところを支えてくれている。
- ・両親を看ようと神奈川から戻ったが、妻が体調を崩し帰ってしまった。これからどのように両親は変化するのか、はしたてさんに協力してもらいやれるだけやってみたい。
- ・夫は若年性。はしたてさんをお願いしてようやくホッとしている。気難しい人だが頼む。(施設の中では自分のいる場が決まっているようだ。車いすに乗ってテレビを観ていた。どなたに話しかけるでもなく、利用開始から間もないため、課題はこれから見えてくるのではないか。)
- ・70歳代の息子さんは、はしたての法人の代表と親しく、最期は母親を施設で看てもらわないと思っているが、自分だけではどうにもならず、泊りもできるし助かっていると話す。(小規模多機能型居宅介護について十分な理解はできていないようだと言った管理者。終末についても説明できていないと言う)
- ・管理者の女性が加賀弁で、穏やかに楽しい会話ができる人。介護に対する思いは人一倍強く、開設の準備時から、町会の会議に小規模多機能型居宅介護の説明に顔出しをさせてもらったり、近隣の方とは自然に繋がる人が作れる人。



はしたての外観



旧家を改修



太い柱は旧家の記念

② 小規模多機能型居宅介護 山代すみれの家

行政が手放された温泉旅館を小規模多機能型居宅介護に転換できる事業者を公募。社会福祉法人篤

豊会が受託することに。開設は2011年7月 登録定員18人、通い定員12人、泊り定員5人。山代すみれの家のある地域の特色は人口・60歳以上の高齢者が最も多い地区。旅館街で、住人は地元の人というより、アパート住まいが多く、仕事で繋がっていた人が多い。単身や高齢者世帯が目立って多く、家族の協力が得られにくい方が多いために、泊りの支援が必要。

訪問して、旅館だったと言う条件があり、あまりの広さに、まだ効果的な活用方法が見いだせてない様子が伺えた。開設して間もないことから、加賀市全体の小規模多機能型居宅介護の事業者間で勉強会や先駆的取り組みをしている事業者を訪問して学んでいる。今後の展開が楽しみだといえる。管理者は、地域と一緒に何かできないか奔走している現状もあった。

● ご家族2人が参加してくださり、テープで記録することを了解してもらう。

- ・同居はしていないがかかわりを続けている70歳代の娘さん。穏やかな母だが心配なところを山代さんが補ってくれて助かっている。耳が遠い母。ずっと働き続けてきた母で、何もしていないことに罪悪感を持っているようだ。山代さんのお蔭で（娘さん）自分自身の愚痴も全部聞いてもらえて、気持ちが安定していると語る。
- ・100歳の母親を看ている娘さん。温泉街で働いていて暇がないと。温泉街も人手不足で、朝5時に出ることが多いと言う。山代さんもできて間もないので、手探り状態のよう、皆さん、資格など持っているのですが、毎日通わせてもらい、母は好きな温泉にここに来られている方と一緒に入っている。これは母の望み。それがいいと思うと述べる。



すみれの家外観



フロアの一部



フロアの一部通いの 廊下と宿泊室
方々が居る



4) 岡山県倉敷市 小規模多機能 ぶどうの家 ご家族1人から聞き取り

同法人 サービス付き高齢者住宅 花帽子

ぶどうの家が運営されるに至った経過は、2000年に通所介護。訪問介護・居宅介護の指定を受ける。2004年に現在のぶどうの家に転居し、通所介護を10名から15名へ増員。増員になったことが、職員の動きに変化が生じ落ち着いた雰囲気を保てなくなった。そこで、2か所に分けることに。時間が経過し、家に居られなくなり、宿泊やそのまま住み続けると言う状況になる方も出てきた。5床のグループホームを同じ場所に開設。2006年7月、これまで運営していた訪問介護・通所介護を廃止し、小規模多機能型居宅介護（定員19名 通い定員14名 泊り定員4名）とグループホーム（入所定員5人）を併設し運営することに。2012年、隣の敷地に新しいぶどうの家を建築。同時にサービス付き高齢者住宅 花帽子も建築。高齢者住宅は明日オープンと言う日に訪問させてもらった。人手不足でようやく体制が整ったところだった。開所1日前に既に一人の高齢者が入居。困難な事情のある方を受け入れざるを得なかったようだ。外部の評価が高い分、かなりの努力をして現在に至っている。これまで

の取り組みで2つの介護サービスを同居させることによって、会社が目指す方針に近づけていると代表者。

併設の運営の良さは馴染みの人と同じ場所に移り住むので不安がない。職員数が多いので、個別対応が可能になり、自由度が増える。1日のメリハリがある。暮らしの連続性が得られる等が挙げられると言う。新・小規模多機能型居宅介護 ぶどうの家は登録定員20人、通い定員15人、泊り定員4名。

● ずっと親戚を主介護者として見てきた女性の自宅に訪問し、話を伺う。テープで記録することを了解してもらう。

親の代から親戚を面倒見てあげなさいと言われてきたため、親族6人にかかわってきた。最も手こずった叔母が娘の結納の日にトイレと間違え、風呂場で転倒していて、救急搬送。異常なしと言われ連れ帰らざるを得ない状況に。訪問看護、ケアマネジャーさんをお願いし、一回だけ叔母の様子をのぞいてもらう。ぶどうの家のことを聞かせてもらうが、自分ではバタバタしていた日なので、ケアマネジャーにぶどうの家に連絡してもらい、つながりができた。ドラマのよう。(ぶどうの家に10日間ほど泊まることに。本人の表情が陰しくなることを職員は気に掛け、本人の住まいで受け入れられるかどうか女性と相談) 女性は「主人と娘が協力してくれると言うので、それができた」と。

最期の時「私に「ありがとう」って、最後の言葉を残して。まあ、娘と2人でみていたので。後で聞くと、娘にもその日に「ありがとう」って言ったそうです」「何だか、最期まで看れて幸せだったと思います」と話していた。ぶどうの家の臨機応変に対応してくださる支援があって、女性とその夫、その娘も頑張れたのだろうと、女性の話をついていくところがあった。女性は精神面が不安定になることもあり、時間を作っては東京の絵画教室に通い続けたとも言う。自宅兼会社の事務室には、所狭しと絵が飾られていた。



新しいぶどうの家



高齢者住宅、訪問の翌日オープン



女性の自宅兼会社の事務所

5) 秋田市 小規模多機能和ごや家

開設は2009年4月。訪問した日は12月19日の夕方。日も落ちて、雪が降り続いていて外は冷えている。代表者が分かりづらい所だからと言って、秋田駅に迎えに来てくれた。特別に短時間の聞き取りを受け入れてもらえた。利用者の数人は自宅に帰っていたが、仕事帰りの家族が迎えに来る方もあると言う。ここも、住んでいる方が数名。銀行勤めをしていた代表者が立ち上げたと言う。銀行員であったため、事業所を立ち上げる際の資金借り入れもうまくいき、現在も事業は滞りなく行えていると言う。

寒い地域であり、風呂場の暖房器は大型、そして、床暖房と床材に工夫を凝らしていた。配食を届ける際は「ラーメン屋さんが配達の際に使う入れ物を活用している」と、管理者も共に面白い工夫を

するのが好きなようだ。なかなか居心地が良い場所であった。

外部評価者が評価した事業所の強みの欄には、事業所は、地域の主要道路に面した田園地帯の一角にある。南に面したホールは日当たりが良く、見晴らしも良い。床に衝撃吸収材を使用し転倒の際のリスクを軽減している他、加湿には次亜塩素酸ナトリウム水溶液を超音波噴霧で使用し感染症の予防に努めている。運営推進会議での意見をもとに、地域へ「和ごや家便り」等を通じて積極的に情報を発信したり、隣接する地域交流スペースを活用し毎月「コーヒーサロン」を行う等、地域の憩いの場となっている。代表や管理者は職員育成のため、多くの研修を行っており、職員の仕事への意欲や目標に繋がっている。外出等は可能な限り利用者の要望に応じて支援する等、基本方針の「目配り、気配り、思いやり」に沿って取り組んでいるとあった。



居間の一部



材質を工夫した廊下



風呂場の大型暖房器

6) ① 北海道 美瑛町の 小規模多機能七彩、ひなた 橙 虹

社会福祉法人美瑛慈光会の開設は1997年12月。特別養護老人ホーム慈光園を皮切りに、地域密着サービスに取り組んでいる。理事長の安倍信一氏の地域との繋がりを大切にする姿勢、想像し実現していく姿勢が、現在の法人力を強めていることに繋がっている。現在は介護サービスがない地域（小学校4校が廃校になっている）に、小規模多機能型居宅介護を作ることを企画。その地域の方々と検討会を立ち上げ2年近く。2014年度に完成予定と言う。

既に運営して長い地域密着サービスの4事業所の開設は、
虹 2002年12月 七彩 2007年4月 橙 2007年10月 ひなた2009年4月である。

法人設立の青山東一先生の言葉が現在の法人の姿勢を浮き彫りにしている。

自分の家に帰りたい 自分でトイレに行って排泄したい

その他にいろいろ希望や願いを持って生きている

なんと多くの人たちが立ち直る能力を持っているのか驚くほどである

私どもにできることは声をかける 手を握る 背中をさする 一人にしない

吐血をしたら血を拭いてあげる 痙攣がきたら しっかりと抱きしめる それだけです

老いて病んで死ぬことは敗北ではない 共に歩んで生きたい

そして、法人の基本方針は

住み慣れた地域で生活続けることを支え

「通うこともでき、泊まることもでき、ずっと住むこともでき、家に帰ることもできる 地域の中のもう一つの我が家であることを目指します。」である。

話し合いをする前日にひなた等を見学。90歳代の方が多いことに驚く。「私は92歳」と話してくれ

ると、隣の方は「私は96歳」と言う。美瑛はもともと山林。畑にするために開墾地に住む方々が努力に努力を重ね、現在のきれいでなだらかな美瑛を作った。その頃から頑張ってきた方々で、とても体は元気な方が多いと管理者が話していた。軽度認知症の方が数名いらしたが、元気で明るい。

- この日、午前中は地域の方々が集まり、握りずしを作り、食べながら会話を楽しんだと言う。残った分があり、家族が集まってくるまでの時間を活用し、小規模多機能型居宅介護の管理者3人、指導総括者と共に残った寿司を食べながら苦労話を語り合う。話し合いの場には、4か所の事業所の9家族が参加してくださり、テープで記録することを了解してもらう。
- ・ 親父がばあさんを看ていたけど、亡くなってしまってからひなたを使うようになった。使って感じるのは、兼業農家が多いため、夏場は一人にすることが多くなりどうにもならない。一か月前に計画して泊まるのではなく、必要な時に泊まれるのがとてもありがたい。たまたま最初からかわり、社会福祉法人の慈光園で小規模多機能をやってくれて良かった。
- ・ (うつの主介護者の息子が参加) 父が要介護1の認知症、母が水頭症で1分前のことも忘れる状態。家の中では、母に作るものをメモしたり、薬は目の前で飲むのを確認したりしている。役割を叔母と一緒に午前・午後に分けている。僕は介護ヒステリー、うつ病にもなったので、食器等は全てプラスチック製にして投げても割れないようにしている。(事業所の管理者はなかなか介護者の息子さんとの会話ができず、困っていた。この日、初めて思いを聞くことができて良かったと) 更に、最後に気持ちを皆さんにもう少し伝えたらと話すと、息子さんは「現時点では両親が元気である。片方でもなくなった場合、今度は親と同居しないといけなかもしれない。大変さがまた起きて、ヒステリーを起こすのではないかと不安。僕は旭川に引っ越して、仕事を探して向こうで暮らしたい。次起こるかもしれない状況を、どのように是正かのうなのか。とても悩んでいる」と語った。
- ・ 利用する人がどれだけいるか最初は心配だった。今では、あの人もあの人も・・・ってことがあって、安心して利用できている。安心が違う。
- ・ 我が家は酪農です。父が元気な時はデイサービスを使っていた。小規模で一番いいのは、家族の状況に応じてそれに合わせた仕事をさせてくれるので、それが一番助かる。いずれ、私もと思っていますから(笑)
- ・ 夜中3〜4回、トイレに起こされる。排便があることもあるし、便秘することもあるし、浣腸をかけたりすることもある大変なのです。こういうことをしていた女の人は偉いなと。自分の親を家内はよく見てくれたんです。2か月の間、絶えず自分の見舞いにも来てくれました。お返しだと思って、今はやっています。20日間、ご飯を食べさせに行きました。看護婦さんがやると言うのですが、妻は自分にやってもらいたいと言うのです。今は、ひなたさんをお願いできて助かっています。
- ・ 母が一番面倒を看てもらっている嫁に対しても、本人が気づいていない状況で傷つけている。24時間看でいても難しいのでお願いしている。時々、泊りをしている。最期まで面倒を見てもらえるということ。本人は100歳まで生きると言っている。どちらが先に倒れるか。最期をだれがどのような形で看られるか。これからの課題だ。町内で終わらせたいと思っている。
- ・ 前に総合病院で診てもらった時「薬を増やしますか」と聞かれたんですが、増やさないことにしたのです。90歳を過ぎたし、このまま見守ろうってことにして、延命措置もしないでくださいってことにした。

- ・うちの家族もそうですね。延命措置はせず、痛みの軽減だけしてもらって。
- ・(指導総括) 事業所もかわるが、そこで大切なのは家族の覚悟が必要。勿論、事業所の覚悟も。家族が覚悟なくして事業所だけで進めることは難しい。お互いが「大丈夫だよ」と約束しておかないと。
- ・(ひなたの管理者から) 小規模多機能が地域に出来たってことで、農村部も一人暮らしができるようになった。しかし、亡くなった時に今日見つけてくれればいいけど、何日もほっとかれることはさびしいと言っているのです。隣も遠いですから。何日間も安否が取れないって時に、それを組織的にできないかって話をして、ひなたのシステムを使ってやれないかっていう取り組みをしています。基本は家族が安否を確認してください。それでもダメなときには、ひなたに連絡ください。システムを立ち上げたところです。



七彩

虹

ひなた

閉校になった小学校

ケンとメリーの樹
の立て看板

②幌加内 特定非営利活動法人 よるべさ 小規模多機能 スマイルホームえん

最も雪の深い、寒い朱鞠内湖が近くにある小規模多機能 スマイルホームえん。訪問した時期は道の両側に雪の壁ができていて、車が突っ込まないように道路標識の矢印マークが左右に。

縁は2009年2月、札幌で研修会をした時期に話し合いが始まった。地域にサービスがない。雪の時期は外に出られないお年寄りのニーズを汲んで、町が調整に乗り出し、全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会と話し合いが始まった。蕎麦が日本一おいしいところと評価されている。たぬきや鹿など動物が暮らしの身近かなところにいる。住民の方々は、この地域に強い愛着を持っている。2009年2月、地域の方々と行政の方々、全国小規模の連絡会が集った際、「多くの人が、一度は都会に出ていくが戻ってくる地域ですよ」と役職者が語っていた言葉が印象的だった。地域住民には素晴らしい地域なのだから、この地域を離れずに冬場のお年寄りの困りごとを解決したいとなったのではないかと思われる。

特定非営利活動法人よるべさの理事長黒岩氏は、鹿児島で株式会社浪漫の代表。共生ホームよかあんべや地域サポートセンターよいどこいを運営している。

「スマイルホームえん」が町の広報紙に、次のように取り上げられている。

朱鞠内老人福祉寮横に増築した小規模多機能施設が2009年12月末に完成し、それらを合わせて北部地域包括ケアセンターとして新たに運営を開始する事を記念して、今年1月15日(日)に「認知症でも安心な街づくり」と題した講演会を生涯学習センターあえる97のふれあいホールで開催しました。当日は107名の方(町外から28名)が講演会に参加し、厚生労働省老健局総務課長補佐中野孝浩氏を始めとする多彩な講師陣から、認知症になっても障害を負っても身近な地域で暮らし続ける事について話を聞く事ができました。講演会終了後は、場所を朱鞠内の北部地域包括ケアセンターに移して開

所式、懇親会を開催し、朱鞠内地区のご婦人による手作り料理を堪能しながら交流を深めました。また、北部地域包括ケアセンターの愛称が「スマイルホームえん」と決まり、愛称を提案した林あいかさんと指定管理を受けるNPO法人よるべさの黒岩理事長との二人でくす玉を割って披露しました。

<よるべさの理念> (株式会社浪漫の理念と同じ)

- ・その本人の存在感が最後までそこにある暮らしを支援する
- ・その人らしく最後まで生ききる暮らしを支援する
- ・楽しく、明るく地域の方とともに地域の中にあり続ける



朱鞠内湖の近くの宿 小規模多機能



スマイルホームえんの様子

7) ① 加賀市 動橋ひまわりの家

ひまわりの家も、加賀市の公募に選考された社会福祉法人篤豊会が運営する小規模多機能型居宅介護。先に挙げた、すみれの家も同法人が運営。また、同法人は医療法人社団慈豊会との連携をもって事業を進めている。

開設は平成20年5月 登録定員18名 通い定員12名 泊まり定員5名。

基本方針は利用者本意、自立支援、個別ケア

モットーは「愛即実践」。高齢者お一人おひとりを思いやり行動すること。愛をもって高齢者のご希望をしっかりと受けとめ、すぐに対応すること。私たちは常にこの2つの決意を胸に、高齢者お一人おひとりの充実した生活を支援していきます。と挙げられている。

管理者の発言、行動はその基本方針やモットーを意識していると感じた。利用者一人ひとりと意義のある時間を共有するために、地域の特技を持つ方に協力いただいていた(要介護状態の方でも取り組める手芸を90歳の方が教えに来ていた)。また、知識、制度の学習会や小規模多機能型居宅介護のケアについて事業所同士の集いにも良く参加している。

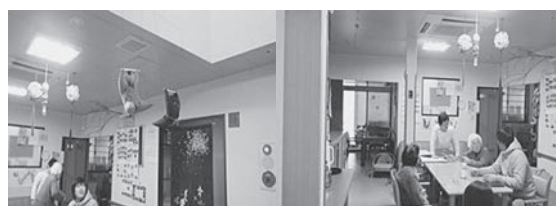
聞き取りの中で、施設や病院と言う用語が随分出てくる。元々、加賀市は病院、施設も多いところ。小規模多機能型居宅介護が増えてきてからは、施設を増やさない方向ですすめている。



動橋ひまわりの家



手芸が簡単にできるよう
講師は自宅で準備をして



ぶら下がっている手芸品は
利用者さん同士が作った

● 7家族の方がひまわりの家の2階に集まってくださった。テーブルで記録することを了解してもらった。

- ・わたしたちはもう、この施設は本当にありがたいと思っています。うちの婆ちゃんに限りじゃないと思いますが、この施設が無かったら老人ホームに入れてずっとお願いすると言う事になっていたと思います。私たちと一緒に生活しながら、ニコニコと笑いながら元気でおる、今93歳ですけど、元気でおられると言うのは本当にありがたい。最近、ちょっと痴呆が進みましたが、話してやれば、昔の話を思い出したり。うちの親戚のお婆ちゃんは、家の人が看られないと言うので老人ホームに入れたんです。具合が悪いというので、主人と見舞いに行ったんですけど、普通の顔をしていなくてびっくりしました。人とも会話せずに部屋で寝ているだけなんかってね。
- ・私もまだ勤めていたんで、昼ご飯を作って出かけていたんです。昼ごはんを食べてないんで、どこか悪いかなと思って病院に行って調べてもらったら、老人性痴呆になりかけやって。家に1人で置いとくからダメなんです。デイサービスに行っていたんですが、具合悪くなって入院して、その後、私がリ्यूマチなもので、どっか施設に入れた方がいいんじゃないかとお医者さんに言われて。婆ちゃんが「おら、これからどうなるんじゃ」と言うんです。「婆ちゃん、元気になってご飯食べて歩けるんだったら家帰るんやぞって」言うのと「ありがと、ありがと」と、これで老人ホームに入れられんわと思ったような。ひまわりのことは病院から紹介してもらった。最初、私の体も悪いし、婆ちゃんも殆ど歩けない状態だから、ひまわりの方で泊めてもらって、こっちの生活を従にして、私ん所へは昼間だけ帰るというような感じでやりましょうと仰ってもらって。病院に連れて行ったら、婦長さんもびっくりして。「こんなに元気になって良かったね」と言ってくださって、もうほんとここのお蔭。

③ 加賀市 京町

京町は医療法人社団長久会が運営する地域密着型サービスの1つ。他に加賀こころの病院、南加賀認知症医療疾患センター、介護老人保健施設加賀のぞみ園、加賀のぞみ園リハビリセンター、グループホームまどい、山代デイサービスセンター、高齢者グループホームいこいの家、訪問入浴、居宅介護支援事業を運営している。医療法人として目指すことは、お一人お一人が安心できる環境の中で最大限の力を発揮しながら、その人らしい暮らしが送れるように共に考え、尊厳ある生活の実現を目指すところ。更に、京町として掲げている「かかわりの4つの原則」には、

- ・利用者様のペースに合わせる事、
- ・やさしく触れ合うこと、
- ・同じ目の高さで接すること、
- ・ダメと言わないこと が挙げられている。

京町の開設は2007年10月、登録定員25名、通い定員15名、泊り定員5名。

半日近く、京町に身を置いて感じたことは、とても落ち着ける環境であること。そして、管理者は若い男性であるが、肩の力を抜いて人に関わっていることや、細やかな希望を聞きながら、地域での暮らしにこだわっている様子が、ご家族との話し合いの時間を調整してもらい思うところが多かった。

2013年6月 NHKの番組「にっぽん紀行 60年の師弟～石川県加賀市～」に京町が取り上げられた。内容は日本舞踊の師匠が認知症となってもお弟子さんが支えていると言う日常の暮らしの番組。お弟子さんの師匠を支えたい思いが、師匠の自宅の踊り場で師匠としてお弟子さんに踊りの手ほどき

をしている姿が生き生き映し出されていた。そして、一人暮らしの師匠の生活そのものを支えているのは京町の職員たち。協働することで、師匠が師匠らしくいられる。



京町



2階から見た1階の 1階の様子
様子



登録している人の住ま
いが地図に

● 5組（一組は若夫婦とその子供二人）のご家族が京町の一室に集まってくださった。テープで記録することを了解してもらう。

- ・母が脳梗塞で、今は左半身不随。私の下の子は障害を持っていて、仕事を持つ私は頼る人がいなくて大変だった。娘は婆ちゃんっ子やって、小さいころから母親に育ててもらって、母親を施設に入れることは嫌やってことになって。たまたま、向かいで仕事をしていたら、ここに小規模多機能ができるって話になって、できて半年くらいして頼むことに。デイサービス等だと泊りはできないっていう日もあって、うちの母はありがたいことに365日の内、通いを利用しないのは1日くらい。ここに頼りっきりみたいな形で応援していただいて。今、娘は施設に入っているんですが、帰ってくることもあり、そんな時に母親が体調を崩したりすると、娘を連れて病院にと言うわけにはいかない。じっとしてられない娘で。そんなとき、一度だけ病院と一緒に行ってもらって助かったんです。これからも、色々あるだろうなと思うと不安。そういうところを助けてもらえることがあったらいいなというのが正直なところ。（多くのことを支援してもらっていて、更にお願ひするのは失礼だと思い、話せていなかったのだそうです。管理者は娘さんのことは理解しているし、話してもらえてよかったと）
- ・私（長男の嫁）が結婚したのは21か22くらいの時ですかね。義母が若年性アルツハイマーになったのは、私がここに来る2,3年前。その時には金沢の大学病院に2,3か月に一度。最初の内はお母さんと一緒にいってやったんですけど、妊娠8か月くらいまではしていたかな。お腹が大きくなったら主人をお願いして。車の免許もってないんで動けないんです。すごい京町の人にもお願いして。（今は京町に泊まっていることが殆ど。時々、長男夫婦と孫と一緒に買い物に出かけているが、最近は車を止めてからなかなか降りなくなった。少しでも一緒にいたいし、歩いてほしいしとお嫁さん）

（お嫁に来る前のことを柴田が質問）ここに来るとき、家族に、本当は母にすごい止められたんです。好きなのはわかるが、好きな人のお母さんてのも分かるけど、結婚するってことはイコール介護するってことにもなるから、母の気持ちとしては娘にそんな思いはさせたくないからって言われたんですけど。私、付き合い始めてここに来たとき、お母さん仕事していたんですが「あんたお昼ご飯食べたかいね」って言って「うどんでも食べに行こうよ」って誘ってくれたんですよ。「饅頭もあるよ、お茶は」と気にしてくれた。お母さん、そんな時タバコ吸ってて、一緒に吸おうとか

言って。すごく気さくな方、今でもそうなんですけど。すごく仲良くなったんです。今まで苦勞して、旦那さん早く亡くなったんで、子供2人一生懸命育てて無理した結果が発症してしまっ。これから、第2の人生をってね。気の毒と言うか、私が何か力になりたいって思ってきたんですけど、現実、我が子が生まれてまもなく、長女をだっこしたままどっか散歩行っちゃったことがあって、どうしようと泣けてきて。お母さん入れ歯をポケットに入れるんですけど、洗い物して戻ってきたら、長女が入れ歯を美味しそうに食べていると、押さえきれない感情と言うか、怒ることはありませんけど、何とも言えない。お母さんに言えない分、長女に当たったこともあって。お母さんの着替えを手伝っている時、長女が抱っこしてと言うじゃないですか。長女が暴れてわーって泣いて。ポイってしたこともある。

図書館に行ってアルツハイマーの本を読んでみたりして、いいということは自分なりに努力をして。お母さん、家にいて私に謝るばかりで。ゴメンねって。私こんなしてできなくてごめんねって。私には何でも言ってくれるんですよ。主人は結構口がきついんで、お母さん主人にはすごく気を使って、主人がいると喋らないんですよ。

お母さん、ここに泊まるのはいややと思うんですよ。やっぱりまだ若いし。なるべく、もっとかわれる方法がないかと思っている。長女が「おばあちゃんどこ行く行く」ってすごいですよ。抱っこして何でも言うこと聞いてくれるし。こんな風に京町さんにお世話になっていたら。私たちもきますので。

日々の思いをご家族は語ってくれた。実際の記録の1/10も文字としていないが、管理者も同席し、初めて聞く内容もあったと言う。このような場が必要と管理者もご家族も捉えてくれたようだった。

8) 熊本 特定非営利活動法人コレクティブ きなっせ、いつでんどこでん、いつでんきなっせ、よんなっせ、縁がわ、いつでんくるばい

1999年6月に法人設立。法人設立以来、認知症の人が、地域の中で普通に暮らすことを実践してきた。小規模多機能型居宅介護 きなっせは登録定員25名、通い定員15名、泊り定員9名。小規模多機能ホーム いつでんどこでんは地域サポートセンターを核に、子供から障がいのある方、お年寄りの方まで利用できる。小規模多機能型居宅介護と住まい（障がいのある方用9部屋）の2棟。地域の方々の緊急用として2部屋確保。通って、訪問して、泊まれて、住むこともできる。別棟の住まいは7部屋で障がい者の方も利用できる。

小規模多機能型居宅介護いつでんきなっせは2階に小規模の住まい（7部屋、うち、障がい者用2部屋）を併設している。現在は「小規模多機能型居宅介護」「定期巡回・随時訪問介護看護」「介護予防拠点」に。3事業とも、住み慣れたまちで、可能なら自宅で暮らし続けることを支援するためのもの。

特定非営利活動法人コレクティブの代表者は全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会の代表。ケアの質にこだわり、ケアを必要とする一人一人の暮らしにこだわり現在に至る。施設職員だった川原氏が宅老所きなっせを開設したのは、1999年4月。長年、介護現場でかかわってきた認知症のお年寄りは、閉じ込めるよりも自由に過ごしてもらった方がその人らしい落ち着いた暮らしを可能にすることに気づいたと言う。数年前にNHKで取り上げられたきなっせにいる「照子さん」へのかかわり方

は、多くの介護実践者のモデルと言える取り組みだった。いつでもきなっせで昼食をいただいた。とても美味しい昼食だった。後で作り手のことを聞くと若年性認知症の女性だった。彼女は以前ホームヘルパーの経験をもち、自分自身の現状をよく理解していた。やりすぎると疲れてしまうので、自分なりの予定表を作って時間配分をしている。周りが見守っている。そして、自宅に帰るとどういう状況になっているかも職員は理解している。だから彼女が無理をしなくて良い配慮をしている。すごいと思った。また、夕方、訪問させてもらったいつでもくるばいには、食事をするために1人で来られた男性利用者に出会った。いつでも自然に利用者を迎え入れる職員と利用者とのコミュニケーション、その場の雰囲気が穏やかでいいなと感じた。学ばせてもらえる時をいただいた。

きなっせ



きなっせの室内の様子



いつでもきなっせ



よんなっせ縁がわ　いつでもくるばい　いつでもくるばいの室内

9) 鹿児島 医療法人 明輝会 小規模多機能型居宅介護ひばり サテライトろうけん青空

開設は2007年1月。幅広い医療サービスと介護サービスを持つ医療法人。鹿児島での先進的ケアを進める一人と言われている総括者。組織の理念は老健施設・病院らしい表現がされているが、ケアの場にはマッチしない。ひばりの管理者、総括者と3人でケアについての意見交換をした。小規模に応募してくる職員に「どうして小規模を選んだか」の質問をする。答えが「自由で」と言う職員ほど、早期に退職する。総括者自身も悩み、学び、現在のケアに関する考え方を見出した。「老人保健施設が中核の組織なので、自分（統括者）自身も当初は型にはめるやり方をしてきた。それだとケアに幅がない。その考えを途中でやめて、自分たちで考えてごらんと任せた。きっかけは小規模の研修会に足を運ぶようになってから。川原代表や小規模のメンバーの話は、これまでと違い素敵なんだ。その素敵さと自分が置かれている立場の違いを反復し、現場に戻る。研修に行くたびに何か違ってくるんだよね。リーダー達に自分の考えを伝え、理解されていると思い、変な自信があった。管理者に話す内容が何時も違うと言われて、職員と押したり、引いたり駆け引きだったね」と現在のひばりの考え方が落ち着くまでの経緯を話してくれた。「自分は雇われている人間なので、ある程度の制約はある。しかし、かなり自由に任せてもらっているので、考えを推し進めることができています」と話す。ひばりの傍にある高齢者住宅もサテライトろうけん青空も、統括者の考えが大きい。その職員の考え方も、随分変わったと言う。



小規模とグループホームひばり、
老健の頃から工夫された浴槽
後ろには高齢者住宅

日々の職員配置等 サテライトろう 廊下と入口
けん青空

10) 鹿児島 株式会社浪漫 共生ホーム よかあんべ 地域サポートセンター よいどこい

鹿児島県十島村に小規模多機能ホームたからを作ったユニークな思いの強い代表者が、北海道にも別の特定非営利活動法人を作り、過疎地の冬場をも支えている。

よかあんべの理念は、その本人の存在感が最後までそこにある暮らしを支援する。その人らしく最後まで生きる暮らしを支援する。楽しく、明るく地域の方と地域の中にあり続ける。

① 共生ホームよかあんべは2007年10月、定員10名のデイサービスに自主事業の宿泊つきではじまったところ。なかなか小規模多機能型居宅介護に移行できないでいたが、2013年2月訪問した時、隣の敷地に小規模多機能型居宅介護を建築中。長い実践から土地の寄付があったと言う。ひな祭りも近い時期の訪問だった。よかあんべの奥の部屋では、代表の母親と利用者さんの4家族が集い、ひな人形づくりに精出していた。

● ひな人形づくりが一段落したところで、職員さんはご家族に私を紹介。介護について思い思いの言葉で語ってもらえた。テープで記録することを了解してもらう。

- ・転勤族でした。近所には女性の方しかいらっしゃらないんですよ。常にお父さんと一緒に。肌着なんか買うときにも、向こうに行っててと言うわけにもいかず、少し認知症が出てきたもんで。地域包括支援センターの方が来てくれて、ここを紹介してくれたんです。ここにきて私の負担が、買い物でもなんでも出かけやすくなりました。(職員さんが、ご主人のことを紹介。ここのコック長さん、そして、エレクトーンも得意と) 家では何にもしないんですが。
- ・母はできなくなったことばかり目につきますが、こちらは「いや、お母さんにこういうことを教えていただきましたよ。今日はこうしていただきましたよ」って仰って「えっ、ほんとにできてるの?」って思うような感じで。子供たちも「お世辞だよ、お母さん」って言う(笑)。本当にその人のいいところを褒めてくださって、家族にも。そうしたら、預けることに対する罪悪感みたいなのがなくなるんですよ。
- ・若い子に「大事にするからね」。今から大事にしておかないと、ここに入るつもりだから。最期はここで看取ってもらいたい。そういう場所ですよ。仲間も仲良くして。(代表から以前はこちらの意向が通じないこともあったが、今は何も問題がないと。ご家族同士で旅行に出かけたりしている。いい関係と喜んでいいる。)

利用者の一人が末期がんで自宅に戻った。ご家族が精神的にいっぱい。代表のところへ相談に見え、その結果、代表は費用はいただかないでここで看ることにした。連携医にも協力してもらうことに。ご家族も1日に何度も顔を出して声をかけることができる。最期までかわらせてもらうこ

とに。(デイサービスで宿泊が可能。しかし、よかあんべに医師がみえて診察をすると、その日の介護報酬を得ることができない。そこで無償でかかわることに決めたと言う) ご家族が利用者に見せる笑顔と安心感。理念を貫き通している組織であった。



共生ホームよかあんべ 入口の様子



ひな人形づくり

② 小規模多機能型居宅介護 地域サポートセンター よいどこい

よいどこいは2012年4月に開設。訪問日は天候に恵まれ、利用者の数名は庭先に長椅子を出してもらい、お茶を飲みながら世間話。「お姉さん、どこから来たの？」と質問。「川崎からです」に賑やかに「私、若いころ横浜に居たのよ」とやり取りが始まる。よいどこいは2階建て。2階は研修会場や地域交流の場として今後活用が多くなりそうだ。

● ここでは、近所のレストランに出かけて食事をしながら介護についての思いを語っていただいた。テーブルで記録することを了解してもらう。

- ・ここにお世話になる前は、母は鹿児島の方に1人で住んでいまして、すごく受け答えが良くって、認知症と言う事に気づかなかったんです。でも、色々なことの辻褄が合わなくなって。私も勤めを持っていて、母を私達のところへ連れてきたのですが、ストレスがたまるようになって。自費を使ってでも利用できるデイサービスはないかと探し利用しましたが、自費のところも土日は完全に休みで、それで困ってケアマネジャーさんに相談して、よかあんべを利用させてもらうことになったのです。その後で、自宅の近くによいどこいができるという事なので、こちらへ移った経緯があります。細やかな気遣いをしてもらえるので、安心して仕事ができますし、ストレスが続かなくなりましたよ。
- ・父が死んで母が入院して、病院が引き取ってくれていう時に、ここで少しおとなしくなった期間があったので、母の部屋のシーツを洗ったら、茶色でした。それくらい、人を寄せ付けない。泥棒って言われるので家の敷地に入ることもしなかった。5年位、シーツを変えていなかったようです。父が活着いるときは、攻撃される私を護ってくれていた。姉には攻撃しないんです。時に殺したくなる時も、でも可愛そうと思うので。(管理者が別に話を聴く機会を持っていると言う。小規模多機能を利用して課題解決には時間がかかりそうだった。娘さんも親から離れたいが、離れられない親子関係があり、困難な状態にしている。地域の方も参加して、話を受け止める役割をしているようだった。)



よいどこい玄関



職員がよいどこいの職員の似顔絵を描いて掲示 皆さんが集うフロア



11) 広島県鞆の浦 有限会社親和会 さくらホーム (サテライトに) 原の家 (現在、本部に)

さくらホームは2006年4月に開設。代表は理学療法士。家族の介護のために仕事を辞め、それがきっかけとなり介護事業をすることに。たまたま見かけた築270年の醸造酢工場が取り壊されると聞き、持ち主と折衝。崩れかかっていた建物の柱一本も大切に元の状態に復帰させる。その上で、改修工事をして、グループホーム、デイサービス、居宅介護支援事業所と裏に小規模多機能型居宅介護事業所を建てて運営。

さくらホームの理念は「私達はご本人らしさを大切に、活かし、ご家族と地域に繋げるケアを実践する」。理念の通り、地域を巻き込んだケアの実践がされていて、多くの研究会や学会で報告されている。ケアマネジャーは地域のお年寄りの集う所に顔をだし、いつもの人の顔が見えなかったら、その人の家に行って様子を観る。一緒に昼ご飯を食べたり、必要によってはその人の家に泊まるという事も早くから実践してきた。

代表は半径400m以内を24時間365日見守ると。体制作りは着々と進んでいる。さくらホームがある鞆の浦は、瀬戸内海航路の要所として発展してきたところ。そのため、坂本竜馬など著名人が立ち寄ったところとしても有名である。古き良い時代の面影を残している。養命酒の基となっている保命酒の誕生地。また、2008年に上映されたスタジオジブリの映画「崖の上のポニョ」のモデル舞台となったところでもある。



さくらホーム



さくらホームができた時に書いてもらった絵



2階には見事な着物



デイサービス



町の通りはひな祭り一色



保命酒の店もひな人形を飾って



鞆の浦の通り



ポニョの映画の舞台となった



坂本竜馬の姿も

● 原の家に6家族が集い、介護に対する思いを語ってもらった。テープで記録することを了解してもらった。

- ・ ちょうど母が入所するときに見学に来たら、自分が小さい時から鞆で育っているから、小さい時の同級生が、今でいうママ友の奥さん方もそこにいらして、昔の話ができることが分かって。「今日は頭が痛いよう」と理由をつけてそんなしていたんです。楽しみが分かって、それからは自分で進んでいくようになったんです。娘の言うことは聞かなくても、職員の方は絶対。
- ・ 最初は介護せなならんののに人にしてもらうのがね申し訳ない、それと、先入観がありますから。そ

んなところに行かしたくないと言う。うちは気が進みませんでしたけど、世話になってからはありがたいと思っています。主人はこの頃来るの楽しみなんじゃないでしょうか。最近は週4回。主人が居る時は目が離せない、何でも分解してしまうんですよ。自分では片づけしているつもりなんです。家にいられる時はつきっきりです。最近は家に送ってもらう時、車からスッと下りないんですよ。家よりいいのかなって。車の運転も好きで。鍵を隠すことが大変でした。最近は息子も協力してくれて。家の車庫にある車は息子のって。その車の番号を見て「よう似た番号や」と言う。記憶があるんですね。運転の腕がいいのは知っているけど、免許証もこの前書き換えに行っていないから、もう免許ないって言って、だから絶対乗られませんからねと言うたら、どうして行かんかったかな言うてますけどね。主人が最初こうなった時、胃潰瘍になったんですよ。気持ちが悪くって、食べられなくて、いっぺんに何キロ減った言いましたかね。今は一所懸命太りたいと思って食べていますけど太れませんね。

- ・困ったらすぐ連絡して、対処方法をすぐ教えてくれて、私もボランティアでさくらホームによく出入りさしてもらうようになってね。本当にお母さんが喜んで、家ではああいう笑顔なんか見たことがないのに。お母さん自身も幸せだと思っているからねこれから、ずーと続いてほしいし、見送るのもみんなの中で自然に送ってくれたら。それができるんじゃないかという可能性が見えてきたんで、気が楽になってね。



原の家



さくらホームの活動が記事に、ご家族が持参

12) 愛媛県南宇和郡愛南町 (財) 正光会御荘病院 NPO法人ハートinハートなんぐん市場

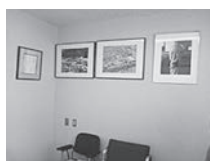
小規模多機能型居宅介護「アロハ」 認知症対応型通所介護「結い」じょうへん

サバティカル最後の場を愛南町にした経緯は、国の認知症関係の委員会で、精神科病院をもちながら常に地域と人に着目した意見を述べていた長野先生の仕事場に伺いたいと思ったからである。多忙を極めている長野先生が2日間案内役をしてくれた。宇和島駅から車で1時間強かかり到着した病院の古さに驚いた。創設者に呼ばれてこの病院の医師になったと言う。「貯めていけないものは糞と金」と言われたと懐かしむ。診察時間であったため、「全部見て行って」と職員が病院内を案内。古き悪しき時代の臭いや病室があった。数年内にこの病院はなくしたいと言う。診察が終わり、山の上にある病院から約1km離れた御荘湾の海辺に精神障がいの方々の住まいを案内してくれた。以前は真珠が盛んな地域だったそうだが、そこを平山寮として活用。目の前は海。魚が目の前を泳いでいる。退院しても帰るところのない人たちが自主運営。「以前、横浜に住んでいたよ」と話してくれた寮生。かわいい山羊も飼っている。夏などは都会からバンドを呼んで、夏フェスディバイルも行い賑やかだよと長野先生。

ミカン畑は山1つ2つありそう。シイタケ栽培の場には、既に退職したと思える方々と精神疾患を

もつ方々が一緒に仕事をしている。炭を焼いたり、観葉植物のレンタル業をしたり、アボガド栽培も今後手がけると言いながら、成長しきっていないアボガドの木が育つ温室に案内してもらった。「障害を持っていても、認知症になっても安心して暮らせるように」が柱。これらで、彼らは病気を持っても普通に暮らせるようになる。なんぐん市場がNPO法人になったのは2006年。役員の顔ぶれは地元企業の経営者、障がいの当事者、家族、医療、福祉のボランティア等様々。長野先生の行動力に驚く。指定管理者となって経営しているのは「山出憩いの里温泉」。若者たちが都会からきて、この職員になっていた。温泉旅館の一角に自分たちで作ったと言う一室で、とれたての魚と野菜、果実酒など数十種を目の前に、これまでの取り組み等話してくれた。

町中の競売に出ていた物件を活用し、デイサービス、小規模ロッジ風の多機能型居宅介護も運営されている。デイサービスで目を引いたのは若い職員の利用者への言葉がけ。殆どひきこもり状態の利用者が週1回だけ参加。利用者の自宅の庭に咲いていた花1輪を話題に、その利用者和其他の利用者も巻き込んでみんなが表情豊かになっていく。目的が明確。このデイサービスの方は近所の子供たちが宿題をしたり、遊んだりできる場になっている。小規模多機能型居宅介護の職員の特徴があった。看護師の多いこと。どんな方でも地域で暮らし続けられるようにと言う、長野先生の強い気持ちが感じられた。



(財) 正光会御荘
病院



平山寮の周辺
山羊が



魚が目の前に



アボガドの温室



山出憩いの里温泉



温泉の中に



結い じょうもん



フリースペース アロハ



アロハの宿泊室

おわりに

この報告書には書ききれないほど、多くの場で多くの方々にお世話になった。どこの事業所も日々のケアに多忙を極めていたが、案内役をしてもらったり、ケアについて話し合う時間を取ってもらったり、ご家族へ参加の働きかけ、その準備等に多くの時間を割いてくださった。当初の計画は、何軒かの事業所のご家族から思うところを伺えればと思っていたが、周囲はそれでは許してくれなかった。「このような場を定期的にもって、ご家族などから話を聴かないとね」と、新たな取り組みをしようとする事業所もあった。私としては感謝の言葉しか見つからない。

先駆的なケアを行っている小規模多機能型居宅介護事業所は、組織として歴史があった、思いが深かった。自身が運営しているような単独事業者は、広島のだうろホーム、鹿児島のだうろホームよかあ

んべだった。相当の苦労を重ねて今がある筈が、関係者は生き生きしていた。進むべき方向性が明確なのであろう。理念が具体的で、それに向かって進み、地域の信頼を確実に得ている。事業の質を高める努力を惜しんでいない。利用者、その家族からの信頼も厚い。訪問した先は、どこも掲げられた理念は分かりやすく表現されていた。社会福祉法人、株式会社と、形態は様々だが、具体的で分かりやすい表現で、組織の覚悟をもって行動していることを肌で感じた。

古い建物の再利用、古い建物に少し手を入れて、新しい建物にと建物の特徴も様々。どんな建物も、日々、利用者と共に、人と共に生活することで生活感が漂っていた。また、地域の特性は建物の中にも、日々のケアの取り組みにも表れていた。美瑛町の小規模多機能型居宅介護の利用者の多くは以前開拓者として土と共にあった方々だからこそ、土に親しみ、野菜を作り収穫する。ケアをしているのではなく、生活していると言う表現がふさわしい。趣のある小京都を彷彿とさせる加賀市では、掛け合う加賀弁がやさしく動きも緩やか。結構、厳しい状況を話すご家族の言葉そのものの物腰が柔らかい。

これからの国が勧める介護事業の目玉の1つが小規模多機能型居宅介護である。2006年以来、足踏みをして増えなかった小規模多機能型居宅介護が4000か所を超えた。国は複数の省同士がタックルを組んだ。その結果として、ケアのプラス面、マイナス面が表れ始めている。利用者、その家族が暮らしたい形が叶えられるよう、多くの事業者が質にこだわるケアを目指してほしいと思うばかりである。

原稿受領2014年1月7日